

[研究ノート]

## 中尾佐助と新京都学派

中野 達司

### はじめに

中尾佐助は、狭義の専門は栽培植物学、育種遺伝学であったが、植物学から文明論と思われる領域に至るまでの幅広い研究活動を展開した<sup>1)</sup>。没後十余年にして刊行された『中尾佐助著作集』（全六巻、北海道大学出版会、2004年～2006年）にあらためてその研究の軌跡を辿ることができるが、彼の行なったフィールドワークの数々、そしてその博覧強記ぶりには驚嘆させられる。小稿は特にそのフィールドワークを「探検」と捉えて綴るものである。

中尾が活躍した時代、彼もその中に入れられる新京都学派と称されることのある一連の研究者、文筆家がいた。新京都学派そのものを論じるのが小稿の目的ではないが、中尾の学問などを考えるに同学派に触れることは自然と思われる。同学派を形成したとされる面々（桑原武夫、貝塚茂樹、今西錦司、上山春平、梅棹忠男…）の中でも今西錦司は中尾の研究活動に大いに影響があったと思われ、その視点から小稿は書き進められる。水生昆虫の棲み分け論、霊長類の行動研究などを経て、やがては自然学を提唱するに至り、またダーウィンとは異なる進化論を展開した今西の、研究者としての、また知識人（知的探求者）、そして山岳人（登山家）、探検家としてのあり方は、中尾にも見出せるものであると筆者は考える。

中尾佐助を知る者には、農耕の起源、照葉樹林文化論などへの取り組み、学説が彼の業績として思い浮かぶことであろうが、小稿は彼の提唱した学説

そのものの適否を検証するものでない。彼にそのような学説を展開せしめた、彼の研究活動や探検について、そしてさらにそれらの背景にあった時代を探り、小稿なりの中尾佐助像について考えてみようというものである。

## I. 新京都学派

新京都学派を語る前に、「新」以前の京都学派であるが、それを聞いて先ず浮かぶのは西田幾多郎、田辺元に代表される、ある時期の京都帝国大学（以下、旧制の京都帝国大学、新制の京都大学の何れも京大と記す）哲学科であろう。西洋の哲学を読み解くにとどまらない独自の哲学が展開されていたと思われる、その時期の京大哲学科には一定の評価があり、旧制第一高等学校の俊英が卒業後、東京帝国大学でなく京大の哲学科に進学するなどしていた。そこに登場した人々が京都学派と称せられるものを形成したと思われる。一方、内藤湖南らの東洋学にも京大独自のものがあり、京都学派と称せられるべき学風であったとされ、実態としてはその方が哲学のそれよりも古く、また哲学の京都学派のように第二次世界大戦後「断絶」されることもなかったが、小稿においては東洋学についてはこれだけにとどめる。

哲学の京都学派について『京都学派』の著者、菅原潤は「西田幾多郎が独自の思索で提示した哲学に、田辺元が西洋哲学史の全体を見渡した上での位置づけを試みたことによって成立した」<sup>2)</sup>とする。一方、武田篤司は『物語「京都学派」——知識人たちの友情と葛藤』において「京都学派」なるものが実在するものであったか疑問であるとして京都学派に「」を付しながらも、「学派」は存在しないにしてもそれに属するとされる「人間」群は存在しているとしている<sup>3)</sup>。そして「京都学派」について以下のように述べる。「京都帝国大学哲学科において、西田、田辺の両者、ないし、その何れかから教えを受けた者たち特定の一群ではあるが、だからといって、『創始者』の思想を祖述・継承・発展させる『組織的人間』ではなく、師弟ならびに弟子たち相互の間にゆるやかに誕生してきた、知的・人格的・学問的ネッ

トワークの参加者・形成者の謂いにはかならない。(中略)その中心に、西田や田辺が存在していたのである。」<sup>4)</sup>

少なくともそれに属する人間がいた学派の呼称の初出について、竹田は詳らかでないながらも1934年の戸坂潤『現代哲学講和』ではないかとしている<sup>5)</sup>。それは軍靴の響き始めた頃であるが、京都学派はその時代と、ある意味不幸な関りを持つことになる。治安維持法の下で、京都学派に属するとされた者の中に獄死者が出た一方で、敗戦後、京大哲学科の中心部分が戦争責任を問われることとなる<sup>6)</sup>。1945年6月に西田は没し、同年3月田辺は定年退官している。そして彼らの後継者は戦争責任により去ることを余儀なくされ、竹田によれば京大哲学科は「崩壊」した<sup>7)</sup>。そして哲学に関わる京都学派は一つの時代を終える<sup>8)</sup>。

そして新京都学派であるが、柴山哲也によれば「新京都学派とは、戦前、京都帝国大学の西田幾多郎の周辺に集まった一連の哲学者の学風を京都学派と呼んだのに対し、戦後、新しくスタートした京大人文科学研究所の学際的な学問スタイルを指す。桑原武夫をリーダーとして、貝塚茂樹、今西錦司、上山春平、梅棹忠夫、梅原猛、鶴見俊輔らが新京都学派の草創期を担った。」<sup>9)</sup> 新旧の京都学派の明解な説明と思われるが、同じ大学の哲学科から人文科学研究所(以下、人文研)に場が移り、桑原武夫が登場する。桑原はフランス文学者であったが、その研究と活動、著述の幅広さは超人的であり、梅棹忠夫は彼を「知的巨人」と評している<sup>10)</sup>。人文研が学際的研究の場となり、多様な研究者の参画により、ユニークと評される研究成果を上げてきているのは、その草創期を担った桑原に負うところ小さからずと思われる。

人文研は1949年に、それまでに存在した京大の諸研究所を統合して日本・東方・西洋の三部構成で発足し、その特色として字義通りの共同研究が行なわれていたことが挙げられる。桑原に限らず、人文研草創期を担った面々の多くは戦前の京都学派の影響を受けて育ち、戦前を引きずりながら逡巡したとして、柴山は新京都学派の学問について次のように述べる。「戦前と戦時中において日本の何がどう間違ったのか、しかし間違えていなかったこと

は何で、もともと日本とはいかなる固有の文化文明をもった国だったか、を問い詰めることが学問の本質だと考えたのだ。したがって戦前の大東亜戦争史観や戦後のマルクス主義などのイデオロギーに依存する学問方法とは無縁だった。」<sup>11)</sup> そのような精神的拘束のない環境で桑原は、そこに集まった者たちと自由闊達に学問を展開した。

そしてそれに含まれるのは、貝塚茂樹ら上記の6名に加え、人文研で河野健二、井上清、多田道太郎、橋本峰雄、飛鳥井雅道、藤岡喜愛、樋口謹一、島田虔次、作田啓一、荒井健、飯沼二郎、米山俊直、川喜田二郎、伊谷純一郎、中尾佐助であり、中国文学の碩学、吉川幸次郎、早世した高橋和巳、さらに加藤秀俊の名も挙げられる<sup>12)</sup>。人文研創設当時のメンバーであり後に所長も務める河野健二は人文研について、「他の同種の研究所と相違する点があるとすれば(中略)『共同研究』を自己の課題・責務として真剣に考え、その遂行に努力してきた点にあるといえる」<sup>13)</sup>としている。桑原は西洋部の主任として共同研究をリードし、第二代所長となる(初代所長は貝塚茂樹)。河野は「『新京都学派』とか『人文学派』とかいう呼び名が、桑原さんを中心とするグループにたいして使われるようになった。もちろん、ほめ言葉としてのみ使われたわけではないが、気にかける者もなかった。」<sup>14)</sup>と振り返っている。

人文研の西洋研究は、桑原の下「ルソー研究」、「フランス百科全書の研究」、「フランス革命の研究」などで成果を上げているが、そこには今西率いる社会人類学の研究グループもでき、梅棹忠夫も参加している。梅棹は人文研草創期を、そして新京都学派を語るに欠かせない人物であるが<sup>15)</sup>、彼と桑原、今西の三者は旧制中学(京都府立第一中学校、以下、京都一中)、旧制高校(第三高等学校、以下、三高)、大学(京大)の何れにおいても同窓であったが、彼らは「山」仲間であったことも小稿は重視する。「知的巨人」桑原が決して書齋だけの研究者ではなかったことは彼の研究、著作に触れた者はよく知るところと思われるが<sup>16)</sup>、三高時代に山岳部に属し、1954年には京大学士山岳会チョゴリザ遠征隊隊長として54歳にしてカラコルムの同

峰（7,654メートル）登頂を成功に導いている<sup>17)</sup>。

今西については次章で述べるが、彼は登山に関しては13歳から85歳までの間に「日本千五百山」の登頂を達成した山岳人である<sup>18)</sup>。梅棹は京都一中、三高、京大で今西の後輩であるが、何れにおいても山岳部（京大では名称は旅行部山岳班）に所属した。そして大学以降においては度々今西と探検に同道している。そして両者とも大学での専門は生物であった。今西は、今西学など呼ばれることもある学問を展開して既存のアカデミズムに挑戦したかの感ありで<sup>19)</sup>、晩年には自然学というものを提唱した大立者であり、梅棹も「文明の生態史観」<sup>20)</sup>を世に問い、民族学、文明論など幅広い研究で活躍し、国立民族学博物館所長を務めるなどした稀代の大学者であるが、彼らの研究に学生時代からの探検の持つ意味は小さからぬものありと思われる。

今西の三高入学の翌年、今西、桑原そして西堀栄三郎<sup>21)</sup>らによって三高山岳部が創設される。今西も、またやがて入学して来る梅棹も、旧制高校、さらに大学時代は山岳部と共にありであった<sup>22)</sup>。今西は大学院在学中に仲間と、京大学士山岳会と今日呼ばれているAACK（Akademischer Alpen Club KIOTO、初代会長：木原均<sup>23)</sup>）を1931年に結成する。そして、登山の対象は海外にも広がり、探検の要素も加わるようになる<sup>24)</sup>。今西は1934年から翌年にかけて朝鮮半島の白頭山に登り、梅棹も1940年に同山に登頂している。今西は1939年に京都探検地理学会というものを立ち上げる。その意図は「京大に探検グループをつくり、そこに登山グループも含めて、学術探検を推進していくつもりだった」<sup>25)</sup>というものである。今西はそれに先立ち1938年に京都帝国大学内蒙古学術調査隊の一員として内モンゴルの調査に参加しているが、斯様に学術探検の道に踏み出して行く。京都探検地理学会は、会長は京大総長であったが、実質的な推進役は今西であった<sup>26)</sup>。最初の探検先はミクロネシアのボナベ島で（1941年）、今西以下総勢10人から成る探検隊が組まれたが、実際に島の調査に従事したのは7人となり、その内5人が京大の学生で、中尾も含まれていた<sup>27)</sup>。

ボナベ島以来の今西率いる探検隊は、自然を直接に自分の目で見、直接の

観察で得た事実をどう解釈するかを議論した。それについて梅棹は以下のよう<sup>28)</sup>に記す。

わたしたちは探検隊として行動しながら、夜にはキャンプで猛烈に議論をした。

議論はフィールドではなかった。京都においても、ことあるたびにあつまって議論をした。議論はしばしば深夜に及んだ。青年たちに対し今西は常に対等に議論した。わたしたちは論理をふりかざして今西にいどみかかった。今西は若者たちに対しても情け容赦なくきりかえしてきた。それはまるで知的格闘術の道場であった。

この知的格闘においては、つねに自分の目でたしかめた事実とみずからの独創的な見解が尊重された。だれがどういっているなどという他人からの借りものの言説はもっとも軽蔑された。この気風は、今西を中心とするわれわれの仲間のあいだではのちのちまでもながく保持されているものである。

この梅棹云うところの気風こそ、新京都学派の一つの大きな核であり、(それを今西スクールなどと呼ぶなら)今西スクールというものの何たるかを表すものと思われる。次章ではその中心にいた今西という類い稀な人物の、特に山、そして探検との関わりについて述べ、また彼の学問上の功績に若干触れるものとする。

## II. 今西錦司と山、探検

今西は旧制中学以来、生涯、山とともにあり、また生物や自然について考え続け、その集大成が自然学であった。彼自身の言葉によると「その昔、若かりし日に、私は登山に心酔し、一時まじめに『山岳学』なるものを構想したことがあった。いまその山岳学のかわりに、私の晩年になって自然学とい

う言葉がでてきた。自然学とは私にいわせたら全体自然を対象とする学問である。私の山岳学が、与えられたままの山全体を対象としていたように。」<sup>29)</sup>三高、京大の山岳部にて今西は積極的に日本各地の山に挑み、遭難さえも経験したが<sup>30)</sup>、やがて海外の山に目を向ける。目指したのはヒマラヤであった。

そして1931年、その実行団体として今西、西堀、桑原らが、既述のAACK（今日の京大学士山岳会）を設立する。目標をカブル（7,338メートル）に定め準備するも、実行を目前にしながら、満州事変勃発の余波で、その実施は断念を余儀なくされ、その後、AACKは現北朝鮮の白頭山遠征を果たし、1936年から翌年にかけて、世界第二位のヒマラヤの高峰、K2（8611メートル）登頂を計画するが、現地の許可が得られないこともあって、これまた計画だけに終わる<sup>31)</sup>。ヒマラヤ行が実現するのは第二次世界大戦後のことであった。AACK会長、木原の下、今西の他、西堀、中尾、梅棹らが動いてヒマラヤ遠征計画が練られ、未踏峰のマナスル（8,156メートル）を標的とすることとなる（1952年）。AACKはお膳立てをしたところで登頂自体は日本山岳会（JAC）に譲る。そして1956年、JAC隊は三度目の挑戦でマナスルを制する。

今西はと言えば、1952年に偵察としてのマナスル踏査の隊長としてついにヒマラヤに足を踏み入れることとなり、6,000メートル級の山に登っているが、この踏査においては今西が学術探検重視であることが窺い知れる。そして、それには中尾も加わっていた。今西は1936年に京都帝国大学内蒙古学術調査隊（隊長は木原）の一員として山ならずして草原を広く調査し、「これからは探検だと、はっきり意識する」こととなったそうである<sup>32)</sup>。そして既述のとおり1939年に京都探検地理学会を発足させ、ポナペ島での学術探検を行ない、また、それへの参加者を中心とした大興安嶺探検隊の隊長として北部大興安嶺の縦断に成功している。一部は地図の空白地帯を進み、まさしく探検であった。世は戦争の只中であつたが、さらにその戦中、今西は当時の蒙古聯合自治政府の首都、張家口に設立された西北研究所なる日本



政府系の機関に所長として1944年に赴任する。政治的な背景、位置づけは問題であるが、その研究所の陣容は石田英一郎、梅棹、中尾ら戦後活躍することになるスタッフから成り、内モンゴル奥深くでのフィールドワークが展開されるなどするも、ソ連の参戦そして日本の敗戦までのことであった<sup>33)</sup>。

終戦後、今西も中尾、梅棹も無事帰国するが、今西のかつての研究、探検仲間には戦地に散った者もいた<sup>34)</sup>。今西は1948年に京大理学部講師となり<sup>35)</sup>、2年後には人文研の講師に迎えらる。今西の探検の基盤と思われた京都探検地理学会は彼の帰国以前に解散していたが、今西は新たに自然史学会(会長:並河功京大農学部教授)を立ち上げる<sup>36)</sup>。会誌名称も『自然と文化』であり、自然科学と人文科学にまたがる、人文研の、特に今西らの学際性を体現するものであったと思われる。またマナスルを制することになるヒマラヤ遠征計画の段階で、学術探検の要素を具体化するため生物誌研究会を設立する。それは京都探検地理学会の戦後版のようであり、名前(英語名はFauna & Flora Research Society)は生物誌でも生物系以外の教授も名を連ねていたが、その中心には今西がいた<sup>37)</sup>。また、京大山岳部は登山を主とする山岳部と探検を主とする探検部に分かれるに至るが、探検部の設立は当時学生であった本多勝一が中心となり、今西や中尾らの助言、支援の下になされた<sup>38)</sup>。

一方、今西は自身の野外活動も始動し1948年春に九州、都井岬で半野生のウマの観察を行ない、周辺の山を歩いている(同行、川村俊蔵)。また同年冬には都井岬および近くの幸島でニホンザルの調査を始め(同行、川村および伊谷純一郎)、霊長類学、人類学に関わっていく。1958年にはゴリラ調査のために伊谷と共にアフリカに行く<sup>39)</sup>。翌年に人文研で教授となり、新設の社会人類学部門を率い、またその3年後には理学部動物学科に設置された人類学講座の教授も併任するに至る<sup>40)</sup>。今西の功績として今西スクールの学問気風の醸成もさることながら、一つの学問の潮流としての霊長類学を確立したことも挙げられるべきと思われる。門下生には伊谷、川村、河合雅雄らがあり、その潮流から西田利貞、さらには山極壽一など世界をリードす



る霊長類学者が現れている。

斯様に霊長類学において功績のあった今西であるが、小稿においては今西が探検というものを、そして梅棹が知的格闘とまで評した議論というものを重んじる、今西スクール的な学問の気風を作り上げたことを評価するものである。次章以降はその今西の功績に大いに関わりをもつ中尾の探検と学問について述べる。

### III. 中尾佐助の探検

今西の行動軌跡を辿ると、ある時期から中尾が頻出する。今西が、大いに行動を共にした西堀、桑原、梅棹が旧制中学、高校、大学と今西と全く同一コースであったのに対し、愛知県生まれの中尾は名古屋の第八高等学校（以下、八高）を経て京大に進み、入学先は今西と同じ農学部農林生物学科であった。八高山岳部で「三年間ほとんど穂高に入りっぱなし」というほどであり、大学入学後は今西らが山岳班をつくっていた京大旅行部に入部した中尾であったが、農林生物学科教授の木原均については、その名前も知らなかったそうであるし、今西との縁も入部してからのことであった<sup>41)</sup>。

大学1回生時（1939年）の夏休みに西部小興安嶺に遠征し、それが中尾の海外探検の皮切りであったが、在学中に狼林山脈（朝鮮半島北部、1940年）、樺太（1940年～1941年）へ何れも旅行部としての、さらにボナペ島へ京都探検地理学会としての探検ないし調査に従事している（表1参照）。ボナペ島行は前述の通り今西が中心になっての、1941年8、9月の約2ヶ月の調査であったが、随行したのは京大農学部副手であった森下正明を除き全て学生で、中尾のほか吉良龍夫、梅棹、川喜田二郎が名を連ね、中尾は植物採集を担当している。生態学と社会学的な立場からボナペ島の人と自然を追求し、今西も含めた議論が闘わされ、すぐれた学者となっていく中尾らの生態学への開眼の時期でもあったという<sup>42)</sup>。

中尾はボナペ島から帰国後、同年末卒業し、京大農学部副手となり、1943

年に東部小興安嶺調査に従事するなどした後、1944年、内モンゴル張家口に今西を所長として設立された西北研究所の所員を兼務することとなる。同研究所については既述の通りであるが、中尾はそこを「トルキスタンの研究をやろうというところ」<sup>43)</sup>としている。同年から翌年にかけて約6ヶ月にわたり今西、梅棹らと零下40度にもなり「逃げ帰ろうとさえ思った」と中尾が振り返るような冬のモンゴルを歩き、モンゴル人の中で暮らした<sup>44)</sup>。その探検後まもなくの1945年4月、中尾は現地招集を受け山西省で軍務に就き、終戦を迎え、張家口の西北研究所は消滅する<sup>45)</sup>。

同年10月に復員した中尾は1949年、浪花大学(後の大阪府立大学)の専任教員となり、1980年に定年退官するまで勤める。1952年には今西隊長の下、マナスル偵察のためのJAC(日本山岳会)踏査隊員としてヒマラヤに遠征し、ネパールのマナスル近くの、植物を含む現地調査に従事し、また6,000メートル級の山に登頂する<sup>46)</sup>。またその遠征の時、ヒマラヤ中腹の植生が照葉樹林であることを発見する<sup>47)</sup>。前述のとおりマナスル踏査の実行はAACK(京大学士山岳会)からJACに移譲されていたが、1953年に登頂が試みられ、JACマナスル登山隊科学班員として中尾は川喜田と共にそれに参加する<sup>48)</sup>。1955年には京大カラコルム・ヒンズークシ探検隊のカラコルム支隊(隊長:今西)の隊員としてネパールの西、主としてパキスタンの氷河地帯を探検している。

1958年にはネパールの東、ブータンに調査に赴くが、これは中尾一人のみによって行なわれ、従来の探検、調査があくまでも「隊員」として参加していたのと大きく趣を異にする。一人で計画し、実行したもののだが、今西、桑原、そして京大探検部設立に動いた本多などの協力もありブータン王家と知己を得るとの幸運もあって、中尾のブータン行は国王の招待という形で実現することとなる<sup>49)</sup>。中尾の著書『秘境ブータン』のタイトルにある通り、当時ブータンは現在にも増して秘境であり、インド以外の国と国交がなく、「文明国人で、ブータン国境を越えた人の合計は、ブータン戦争に従事した英軍将校を除くと、今までに三十人くらいといわれている。…ブータンのみ

を扱った本は未だかつて、どこの国からも一冊も出版された例がないくらいである」<sup>50)</sup>とのことであった。

そのような秘境に一人踏み入り、約6ヶ月滞在し、植物の調査を主目的に活動する。ヒルに悩まされ、マラリアに注意しながら、高山を越え、氷河を渡り、二人の現地の従者と共に1,600キロの行程を歩き、時にヤクやラバに跨っての探検であった。野生生物相を観察し、栽培植物を調べ、人の生活への見聞と洞察を深め、それらは後の中尾の研究の中核となったことと思われる。そして、この探検行については著書『秘境ブータン』が出版され、読み継がれてきている<sup>51)</sup>。ブータン探検の翌年(1959年)にはインドのシッキム、アッサムにおいて、1962年には東ネパールで調査を行なっている。後者の調査は大阪府立大学東北ネパール学術調査隊を率いてのものであったが、この調査行で中尾のヒマラヤ調査は終わっている<sup>52)</sup>。

そして1968年、中尾はアフリカに足を延ばす。京都大学大サハラ学術探検隊の一員として、マリなどの国々で調査に当たる<sup>53)</sup>。中尾は農耕文化班に属し、「遊牧民の中で農耕の最初の姿がどのように残っているか」が彼に課せられた調査課題であった<sup>54)</sup>。その後も彼の探検は続く。(表1参照) 彼自身の述懐によると「日本人で一番たくさん探検をやったのは誰かという、それは鳥居龍蔵さんです。二十六回出ているのです。(中略) 私の場合はというと、ホテル泊まりしたような旅行も勘定に入れると二十回になる。(中略) 三番目に多いのは多分今西さんじゃないかと思う。これが十五～十六回です。」<sup>55)</sup>

#### IV. 中尾佐助の学問

前段末尾に紹介した探検についての中尾の言葉は彼が1980年に大阪府立大学を定年退官する際の最終講義でのものであった。同年に鹿児島大学に教授として迎えられ、南方海域総合研究センターを立ち上げ、1982年に退官、1993年に77歳にて鬼籍に入る。没後『中尾佐助著作集』(全六巻)が刊行

表1 中尾佐助の海外探検調査歴

年月	年齢	海外探検調査
1939年7～8月	23歳	西部小興安嶺 [京都帝国大学旅行部]
1940年7～8月	24	朝鮮半島北部狼林山脈 [京都帝国大学旅行部]
1940年12月～1941年1月		カラフト(サハリン) [京都帝国大学旅行部]
1941年7～10月	25	ボナベ島 [京都探検地理学会]
1943年9～11月	27	東部小興安嶺 [満州国軍小興安嶺調査隊]
1944年9月～1945年2月	28	内蒙古 [蒙古善隣協会西北研究所]
1952年8～12月	36	中部ネパール [日本山岳会マナスル調査隊]
1953年2～9月	37	中部ネパール [日本山岳会マナスル登山隊科学班]
1955年4～9月	39	パキスタン [京都大学カラコルム・ヒンズークシ探検隊]
1958年6～11月	42	ブータン [ブータン国王招待]
1959年9～12月	43	シッキム、アッサム [ロックフェラー財団助成]
1962年4～9月	46	東ネパール [大阪府立大学東北ネパール学術調査隊]
1968年1～3月	51	西アフリカ [京都大学大サハラ学術探検隊] (ガーナ、象牙海岸、マリ、ニジェール、ダホメイ、ナイジェリア、カメルーン、チャド、スーダン、エチオピア)
1976年5月	59	西ヨーロッパ [個人調査] (フランス、スイス、ドイツ、オランダ、連合王国)
1976年12月～1977年1月	60	東南アジア [日本科学協会助成] (タイ、マレーシア、シンガポール、インドネシア)
1977年3月		地中海地域 [個人調査] (スペイン、イタリア、ギリシャ、トルコ)
5月		中国 [中国政府招待]
1978年8～9月	62	ソビエト連邦 [国際遺伝学会]
11～12月		東南アジア [文部省科学研究費] (タイ、マレーシア、インドネシア)
1980年8～9月	64	パプア・ニューギニア、ソロモン [文部省科学研究費]
1981年1～2月		インド、ネパール [個人調査]
3～4月		南太平洋 [個人調査] (ハワイ、フィジー、パプア・ニューギニア)
10月	65	ブータン [日本ブータン友好協会]
1981年12月～1982年1月		フィジー [鹿児島大学南方海域研究センター・オセアニア海域における水陸総合学術調査隊]
1984年8月	68	中国雲南省麗江 [個人調査]

<出所>佐々木高明「解説 探検と学術調査——エスノボタニスト中尾佐助のたどった道」『中尾佐助著作集 第Ⅲ巻 探検博物学』解説、北海道大学出版会、2004年、566-567ページ。

されたが、テーマ別に編まれた各巻のタイトルは第Ⅰ巻から順に『農耕の起源と栽培植物』、『料理の起源と食文化』、『探検博物学』、『景観と花文化』、『分類の発想』、『照葉樹林文化論』である。第Ⅰ巻、第Ⅲ巻、第Ⅵ巻に入れているものが中尾の業績として比較的よく知られたものと思われるが、その守備範囲の広さは驚嘆ものである。

中尾の業績で単著として最もよく知られているのは『栽培植物と農耕の起源』（岩波新書、1966年）ではないかと思われ、それは知られているにとどまらず、高く評価されてもいる。梅棹は同書は和辻哲郎『風土—人間学的考察』（岩波書店、1935年）より名著であるとしている<sup>56)</sup>。そして中尾が発した学説として「照葉樹林文化論」は特筆ものといえよう。中尾は「照葉樹林文化論」独自の著書こそ出さなかったが、上山春平編『照葉樹林文化—日本文化の深層』、上山春平ほか著『続・照葉樹林文化—東アジア文化の源流』など、様々な場において中尾は大いに語っている<sup>57)</sup>。この中尾の提唱は具体的な内容は批判、修正の対象となるが、その提唱自体に大なる価値ありと思われる。中尾の研究仲間で、よき批判者、理解者であった佐々木高明は「新しい発見や新しい発想によって照葉樹林文化の内容は、常に変更が加えられ、新しい姿に変容・進化してきたのである。そういう意味で照葉樹林文化論は『未完の大仮説』というべきもので、そうした学説の変更や進化を、中尾さんは、その学識生涯を通じて積極的に実践してこられた。」<sup>58)</sup>と述べている。池内紀は「（照葉樹林文化論は）戦後、日本人によってもたらされた学説の中で、とびきり独創的で、雄大な視野をもち、さまざまな分野に広範な影響を及ぼした。（中略）中尾佐助自身は『照葉樹林文化論』といった著書にまとめなかったし、体系化もしなかった。」<sup>59)</sup>と評している。

「照葉樹林文化論」において、ヒマラヤから雲南省などの中国南、中部を経て日本の西南部に至る照葉樹林帯を一つの生態系ゾーンと捉え、そこに展開されてきた農耕、文化に共通性を見出しているが、中尾にそれを考えさせたのは小稿でも触れた1952年のヒマラヤへの探検であった。その時のことを中尾は以下のように語っている。「カトマンズ盆地を囲む尾根の上でキャ

ンプをした。(中略) 遠いところの山には黒々とした森が見えてきた。(中略) その森は常緑カシが主力の照葉樹林だったのです。』<sup>60)</sup> 探検それ自体に意味ありと思われるが、研究者として中尾はそこできっかけを得、その後の探検での観察、そしてとよりの該博な知識から、あの「照葉樹林文化論」を展開するに至ったのであった。

彼の専門、研究領域からして植物の知識が豊富なのは当然であるが、小中学生時に牧野富太郎の植物図鑑所載の日本の植物の大部分を覚えてしまったそうで、それは彼の一生の財産で、それによって得たものは非常に大きかったと彼は述懐している<sup>61)</sup>。探検の記述において彼は眼にする植物を次から次へと描写し、それが大概種名つきであったことは読んでいて驚きであったが、今西に同行した探検においては、今西が植物を見てわからない時、『『佐助!』と呼んで、彼(中尾)がたちどころに答えるんです、百科事典みたいに』と他の同行者が語っている<sup>62)</sup>。中尾は栽培植物学者、遺伝育種学者であり、民族植物学者と評されることもあるが、筆者にとり中尾は先ず超一流の植物学者であり、そして偉大な博物学者であった<sup>63)</sup>。

植物に限らずして博識の中尾がヒマラヤなどを探検して、照葉樹林文化論に結実する着想を得たのであるが、その彼の提唱したものは、新京都学派的な討論で揉まれることとなる。その討論に参加していた佐々木によれば「中尾さんの理論構築にあたって、大きな影響を与えたのが、『京都学派』などと通称される今西錦司博士を中心とする研究グループであったことは確かである。(中略) (その研究グループでは) 文字通り喧々囂々の討論を行なった。この研究会でいつも要求されたのは『外国の文献引用などではなく、自分の足で調査した結果にもとづいて語れ』ということで、こうした点から常に鋭い批判、ときにはきわめてシニカルな批判をする一人が中尾さんであった。』<sup>64)</sup> 中尾の討論における斯様な姿勢は佐々木のみならずが語るところであり、佐々木が「京都学派」と記しているものは小稿では新京都学派もしくは、その中の今西スクールとするものである。「自分の目で見て、自分の頭で考えよ」と今西は若き者を指導したと、若き者であった梅棹は述懐してい

るが<sup>65)</sup>、佐々木が伝える中尾の討論時に見せた姿勢も今西の指導に一致する。要は研究対象の「現場」が重んじられているのであり、実証性を枢要とするのが中尾の学問姿勢であった<sup>66)</sup>。

## むすびにかえて

旧制高校で山に親しんだ中尾は大学で木原、今西に出会い、またその大学には桑原もおり、やがては梅棹も現れる。木原、今西は「山」でも師であったが、それにとどまらず、「植物学では木原均博士、生態学では今西錦司博士に親しく教えを受け…」と『栽培植物と農耕の起源』の「あとがき」に記している。このような人的環境下で中尾は「野外」に出る研究者となり、大戦の直前、直後の、海外調査は稀であった時代に、ヒマラヤなどで探検調査を行ない、また桑原率いる人文研の新京都学派と呼ばれるような仲間、特に今西、梅棹そして上山らと談論風発の場を共にし、あの学説「照葉樹林文化論」を提唱した。

今西も中尾も、その探検の拠点は大京であったが、その大京は今日でこそ「探検大学」などと評されるも、かつては必ずしもさにあらずであった。中尾は語る。「…これは探検の道なのですが、(中略)今西さんを親方にして探検をやっている。その頃京都大学ではそういう人達はどう見られていたか」といふと、あれは学会のヤクザ者よ、そういう見方なんです。(中略)日本の学界といわず社会の探検に対する風土というものは、そんなものであった…。」<sup>67)</sup> この中尾の弁における「その頃」とは彼らがヒマラヤを探検した1950年代である。「探検」に敢えて「学術」を冠するまでもないが、学会のヤクザ者は学術探検のパイオニアであった。

最後に中尾への筆者の不満に発することを記す。世界の栽培植物を俯瞰し、そして農耕の起源を体系づけ、各地に探検調査に赴いた中尾にして、アメリカ大陸での調査は皆無であり、このことを筆者は意外に思ってきた。梅棹が名著と評した『栽培植物と農耕の起源』においても、「新大陸農耕文化」



を世界の四つの農耕文化の一つとして挙げ、その農耕文化を高く評価しているが、他の三つと比べると記述量が著しく少ない。「自分の目でみる」ことを重視する中尾にあっては記述が少なくなるのは当然かもしれないが、中尾ならではの現地での調査と知見に基づいて書かれた「新大陸農耕文化」を読みたかった。

中尾がアメリカ大陸、特にマヤ、アステカが栄えたメソアメリカ、そしてインカが栄えた中央アンデス地域の何れにも行かなかったのは疑問であったが、今般、小稿執筆のために読んだものの中に、それに触れるものがあった。中尾は南米探検への同行を請われたことがあるが、応じなかったそうであり、その時の弁が「あんなところやったら泥沼に足を引っこむようなもんや、一生足がぬけられんようになる。」<sup>68)</sup> というものであった。中尾の南米探検記が読めないこと、残念至極である。とはいえ、彼の『秘境ブータン』が読めることを多とする。

## 注

- 1) 中尾の専門の何たるかは第3章で触れることになるが、彼は主論文“Studies on the taxonomy, origins and transmittance of the crops in the Sino-Himalayan range”により1962年に京都大学農学部から農学博士の博士号を授与されている。ここに狭義の専門として記したものは、中尾の主著の一つ『栽培植物と農耕の起源』(岩波新書、1966年)の著者紹介に挙げられているものに依拠している。
- 2) 菅原潤『京都学派』講談社現代新書、2018年、76ページ。
- 3) 竹田篤司『物語「京都学派」——知識人たちの友情と葛藤』中公文庫、2012年、387-388ページ。
- 4) 同書、388ページ。
- 5) 同書、76、80-81ページ。竹田はその情報を古田光に負う(出所は不明)としている。
- 6) 京大四天王などと称される西谷啓治、高山岩男、高坂正顕、鈴木成高らの太平洋戦争直前の「世界史的立場と日本」なる座談会での発言が戦争を正当化するものと見做されるなどしたものであった。(菅原、前掲書、116-117ページ。なお、京都学派を形成したとされる三木清、戸坂潤が獄死している。)
- 7) 竹田、前掲書、352ページ。
- 8) 櫻井正一郎はその著書『京都学派醉故伝』において学問領域としても京都学

派をより広くとらえ、また時代としても今日まで続くものとし、小稿が当該落まで述べてきた時代を「草創期」とし、それ以降を「第二期」とし「新京都学派」の時代ともいわれているとする。(櫻井正一郎『京都学派酔故伝』京都大学出版会、2017年、1ページ。)

- 9) 柴山哲也『新京都学派——知のフロンティアに挑んだ学者たち』平凡社新書、2014年、9ページ。
- 10) 梅棹忠夫「知的巨人の人間像」梅棹忠夫、司馬遼太郎編『桑原武夫傳習録』潮出版社、1981年、4ページ(初出:『桑原武夫全集』第七巻・解説、朝日新聞社、1980年)。
- 11) 柴山、前掲書、10-11ページ。
- 12) 同書、39-40ページ。
- 13) 梅棹、司馬編、前掲書、98ページ。
- 14) 同書、106ページ。
- 15) 人文研草創期の多士済々の中でも上山春平の役割は大であり、小稿テーマの中尾佐助との関係からしても上山の存在は重いが、「山」との関わりという意味において名前を挙げなかったものである。
- 16) 野間宏によれば桑原は「空を飛ぶ鷹の目と陸をかける駱駝の足を同時にそなえ…、山野を行き、世界中を歩いて、見、きき、その見、きき、ふれしたものを原型のまま形を変えることなくとらえ、その見、きき、ふれしたものの一定群の上にのぞんで、そこに新しい組み合わせをつくり、新しい配列を作り出す。」(野間宏『桑原武夫全集』第2巻・解説、朝日新聞社、1969年、558-559ページ)。
- 17) 梅棹は桑原を大登山家と評し、チョゴリザの成功について「当時の隊員たちのかたるところによれば、桑原さんの隊長ぶりは、緩急よろしきを得て、誠に堂々たる隊長ぶりであった。」としている。(梅棹忠夫『桑原武夫全集』第7巻・解説、朝日新聞社、1969年、507-508ページ)。
- 18) 斎藤清明『今西錦司伝——「すみわけ」から自然学へ』ミネルヴァ書房、2014年、381、388ページ。
- 19) 櫻井は著書のある章のタイトルを「今西学の登場」としている。(櫻井、前掲書、60ページ)。
- 20) 1957年に「文明の生態史観序説」が『中央公論』誌上に掲載され、1967年に他の論文も含む『文明の生態史観』(中央公論社)が刊行されている。
- 21) 1903-1989。今西の旧制中学以来の友人で京大理学部化学科卒。京大助教授在任中に南極観測隊越冬隊長。
- 22) 今西は三高を2年留年して卒業し、進学先は京大理学部動物学科でなく農学部農林生物学科であったが、登山計画の都合で農学部の方が選ばれたとのことである。(本田靖春『評伝 今西錦司』山と溪谷社、1992年、59ページ。)

また秀才の誉れ高かった梅棹(小学校を5年で、旧制中学校を4年で終え、進学。すなわち旧制高校には通常の経歴の同級生よりも2年早く入学している。)も三高で2回落第した後、京大理学部動物学科に入学しているが、三高で落第した(さらには除籍の危機もあった)のは登山に熱中したからである。梅棹忠夫「雪よ岩よ——三高山岳部の五年」(『梅棹忠夫著作集 第16巻 山と旅』中央公論社、1992年、174-175ページ。)

- 23) 1893-1986。遺伝学者。AACK創設時、農学部教授で、京都帝大旅行部長。後に木原生物学研究所理事長、国立遺伝学研究所所長。
- 24) 斎藤は今西の探検との関わりについて、三高時代の今西が高峰の山行のほか北山などのワンダリングを行ない、それは低山趣味などとは異なり、未知なるものを憧れ求める積極的な意思があり、のちに今西が登山だけでなく探検にも踏み込んでいく原動力となると、記している。(斎藤(2014)、前掲書、94ページ。)
- 25) 同書、143ページ。
- 26) 本田、前掲書、113ページ。
- 27) 斎藤(2014)、前掲書、156ページ。
- 28) 梅棹忠夫「ひとつの時代のおわり——今西錦司追悼」梅棹(1992)、前掲書、468-469ページ。
- 29) 今西錦司『自然学の提唱』講談社学術文庫、1986年、71ページ。(初出:「自然学の提唱」『季刊人類学』第十四巻第三号、1083ページ。)
- 30) 1926年夏、京大2年生時に三高山岳部と共に前穂高岳奥又白登攀の後、クレバスに落ち、今西は肋骨骨折などの重傷を負ったが、同行の三高生が死亡している。(斎藤(2014)、前掲書、98ページ)
- 31) 同書、111-114ページ、122-126ページ。
- 32) 同書、142ページ。
- 33) 赴任前に今西が、大阪高等学校から東北帝国大学に転任する桑原に語った言葉(「クワ、俺はやるぜ」)は探検や山登りのためなら「軍とでも手をむすびまっせ」と言ったものと桑原は察したとの、桑原からの口頭情報を斎藤清明は紹介している。(斎藤清明『今西錦司——自然を求めて——』松籟社、1989年、5-6ページ。)
- 34) 同書、45-46ページ。地理学の伴豊、昆虫学の可児藤吉が戦死している。可児は若くして頭角を現していたが、筆者の個人的見解ながら、戦死の憂き目に遭わなければ戦後、世界的な生物学者になっていたことと思われ、悔やまれる。
- 35) 今西が大学院修了(1933年)以来、理学部の無給講師(大津臨湖実験所)であったことはつとに知られているが、この時の講師就任は有給としてであった。

- 36) 斎藤 (2014)、前掲書、219 ページ。
- 37) 同書、266 ページ。
- 38) 本多勝一『本多勝一集 第2巻 旅立ちの記』朝日新聞社、1993年、479 ページ。探検部誕生への過程では山岳部内のアルピニズム派と探検派の間で激論が戦わされたようであるが、探検派は探検部設立以前に探検講座を開き、講師は今西、中尾、川喜田、桑原、梅棹、藤田和夫で、その6人は成立した探検部の顧問となっている。(同書、475-479 ページ。)
- 39) アフリカには1958年2月2日に出発しているが、その前々夜、1月31日に桑原(当時AACK会長)宅を訪れてAACKのチョゴリザ遠征隊長就任を持ち掛け、翌晩に承諾を取り付け、明くる日にはアフリカに向かっている。(桑原武夫「チョゴリザ登頂」『桑原武夫全集 第7巻』、朝日新聞社、1969年、96-100 ページ。)組織(AACK)の差配も自分の調査の段取りもと、何れもこなしてしまう今西の器量、能力がうかがわれる。
- 40) 斎藤清明は以下のように書いている。26年前の1933年3月31日付で京都帝国大学理学部講師(無給、常勤)を嘱託されて以来の「万年講師」に、ピリオドを打ったわけである。(斎藤(1989)、前掲書、194 ページ。)なお、今西は1965年に京大を定年退官し、岡山大学教養部教授(～1967年)になり、1967年に岐阜大学学長に就任(～1973年)している。(斎藤(2014)前掲書、386 ページ。)
- 41) 中尾佐助『中尾佐助著作集 第Ⅲ巻 探検博物学』北海道大学出版会、2004年[中尾(2004a)]、532 ページ。
- 42) 斎藤(2014)、前掲書、156-158 ページ。
- 43) 中尾(2004a)、前掲書、537 ページ。
- 44) 同書、537-538 ページ。
- 45) 同書、476 ページ。
- 46) 斎藤(2014)、前掲書、254-257 ページ。斎藤によると「その山はチュルーというらしい。」(同書、256 ページ。)
- 47) 佐々木高明「解説 照葉樹林文化論——中尾佐助の未完の大仮説」『中尾佐助著作集 第Ⅵ巻 照葉樹林文化論』北海道大学出版会、2006年[佐々木2006]、765 ページ。
- 48) JACはその年の第一次隊と、翌年の第二次隊で、登頂を果たせず、1955年の第三次隊ががマナスル初登頂を達成する。
- 49) 中尾(2004a)、前掲書、37-42 ページ
- 50) 同書、46 ページ。
- 51) 『秘境プータン』は毎日新聞社から1959年に刊行され(エッセイスト・クラブ賞受賞)、絶版の後、1971年に社会思想社から再出版(現代教養文庫)されている。

- 52) 佐々木高明「解説 探検と学術調査——エスノボタニスト中尾佐助のたどった道」『中尾佐助著作集 第Ⅲ巻 探検博物学』解説、北海道大学出版会、2004年、574ページ。なお、1962年のこの調査には教え子の西岡京二が参加し、彼はその後ブータンの農業に絶大な貢献をし、英雄となっている。
- 53) この調査は1968年1月から3月にかけて行なわれ、調査対象国はマリの他、ガーナ、コートジボワール、ニジェール、ダホメ(現ベナン)、ナイジェリア、カメルーン、チャド、スーダン、エチオピアであった。
- 54) 中尾佐吉『中尾佐吉著作集 第Ⅰ巻 農耕の起源と栽培植物』北海道大学図書刊行会、2004年〔2004b〕、609ページ。
- 55) 中尾(2004a)、前掲書、542ページ。
- 56) 梅棹忠夫「中尾佐助との交遊」『中尾佐助著作集 <月報1>』北海道大学出版会、2004年、9-10ページ。
- 57) ここで取り上げられているのは、上山春平編『照葉樹林文化——日本文化の深層』(中公新書、1969年)、および上山春平、佐々木高明、中尾佐助『続・照葉樹林文化——東アジア文化の源流』(中公新書、1976年)である。何れもシンポジウムの記録をまとめたものであるが、前者は上山(哲学)が司会し、参加しているのは中尾のほか吉良龍夫(植物生態学)、岡崎敬(考古学)、岩田慶治(文化人類学)であり、後者は上山の司会で、参加者は中尾と佐々木(文化人類学)であった。両シンポジウムの間隔、7年の間に中尾は照葉樹林文化を東南アジアの根栽農耕文化の北方適応型としていたものを、根栽農耕文化を照葉樹林文化の南方展開型と捉えるという新しい見方を提起するに至っている。
- 58) 佐々木(2006)、前掲解説、774ページ。
- 59) 池内紀『二列目の人生 隠れた異才たち』晶文社、2003年、191ページ。
- 60) 中尾(2004a)、前掲書、541-542ページ。
- 61) 同書531ページ。
- 62) 本多、前掲書、249ページ。
- 63) 中尾の豊富な知識と関心は植物のみならず生物一般、さらに自然界全般におよぶもので、当人がどのように認識していたかは知る由もないが、その学問は博物学を思わせるものである。今西が晩年提唱した自然学は博物学の延長線上にあるのではないかと筆者は考える。
- 64) 佐々木(2006)、前掲解説、768ページ。
- 65) 梅棹(1992)、前掲書、469ページ。
- 66) 福井勝義は中尾が研究会において発表者に対し否定的であった事例(実名入り)を引き、「そうした中尾さんの姿勢は、なによりも『現場』に支えられる実証性の欠如に対する拒否反応であり…」としている。(福井勝義「豊かな感性に恵まれた実証主義者」『中尾佐助著作集<月報2>』、北大図書刊行会、

2004 年、7 ページ。

- 67) 中尾佐助『中尾佐助著作集 第Ⅴ巻 分類の発想』北海道大学出版会、2005 年、674-675 ページ。
- 68) 山本紀夫「ぼくは南米はやらん」『中尾佐助著作集＜月報 4＞』、北大図書刊行会、2005 年、4 ページ。